文藝春秋は note と資本業務提携しました
出版文化の未来を担う人材をデジタルと紙の両面で発掘・育成します

株式会社文藝春秋は、note 株式会社（本社：東京都港区、代表取締役 CEO：加藤貞顕、以下 note 社）の第三者割当増資を引き受け、出資と資本業務提携契約を締結しました。

本提携により両社で共同コミュニティの創出や各種イベントの共催などを行い、出版文化の未来を担う人材を育成し、書き手と読者をつなげる機会を増やします。また両社社員の知識や技術習得を目的とした、社員交流も行う予定です。

資本業務提携の概要

2019 年 11 月、月刊「文藝春秋」が初のデジタル定期購読サービス開始にともない、サイト構築のパートナーに note を選択。「文藝春秋 digital」が誕生しました。同サイトでは、単に記事を note 上で販売するだけではなく、note で人気があるクリエイターを「文藝春秋」本誌の書き手に迎えるなど、様々なコラボレーションが生まれました。

それから 1 年。note というプラットフォームとの関係は、「文藝春秋」という一雑誌の枠を超え、共同イベントの開催、読書感想文コンテストの実施など、文藝春秋社全体に広がっていきました。

文藝春秋社は、1923 年に創業者の菊池寛が「人に頼まれて物を言うのではなく、自分で考えていることを自由な心持ちで言ってみたい」という思いで立ち上げた雑誌から始まった会社です。一方の note 社は、2014 年に創業者の加藤貞顕氏が「だれもが創作をはじめ、続けられるようにする」という理念を掲げ立ち上げたプラットフォーム note を運営する会社です。時代は違えど、「クリエイターによるクリエイターのためのメディア」を目指して始まったという点で、両社の創業の理想には共通するものがあります。

この度、資本業務提携によって、両社の関係をさらに強め、さまざまな取り組みを行うことになりました。

株式会社文藝春秋　社長　中部嘉人コメント

文藝春秋は、作家の菊池寛が「人に頼まれて物を言うのではなく、自分で考えていることを自由な心持ちで言ってみたい」と思い、立ち上げた雑誌から始まった出版社です。創業から約 100 年、常に新しいことに挑戦しながら今日まで歩んできました。この度の note 株式会社との資本業務提携も新たな時代に向けたひとつの挑戦です。

note は全てのクリエイターのためのプラットフォームとして誕生したと聞いています。その成り立ちは、菊池寛が創刊した雑誌「文藝春秋」にきわめて似ています。書き手の存在なくして出版文化は成り立ちません。未来を担う書き手（クリエイター）を発掘し育成する――note はそうした私たちの志を共有する心強いパートナーだと考えています。

出版業界では今、プリントメディアとデジタルメディアの垣根がなくなりつつあります。プリントメディアで活躍していた書き手はデジタルメディアで発信し、デジタルメディア出身の書き手はプリントメディアに進出する。「デジタルはプリントの対抗軸」と考えられていた時代は終わり、今やコンテンツは両方の空間を自由に行き来しているのです。読者一人ひとりが自分に最適なフォーマットでコンテンツを楽しめる時代になったとも言えるでしょう。

文藝春秋が新たな時代に適合し、この先も読者にずっと良質なコンテンツを届けていく上で、note との協業は大きな効果をもたらすと信じています。ともに出版文化の新しい価値を創造していければと思います。

note 株式会社 代表取締役 CEO 加藤貞顕氏コメント

ネット時代におけるクリエイターのありかたは、どうなっていくべきなのか？

いまからちょうど 9 年前の創業時、この問いをずっと考えていました。

その時に参考にしたのが、菊池寛が行ったことです。彼はクリエイターによるクリエイターのためのメディアである『文藝春秋』をつくり、それを支える会社・文藝春秋社を創業しました。そこから、数々のスターと、数々の作品が生まれてきました。この 100 年間で出版業界がはたしてきた文化的な力は、日本だけでなく世界にまで届くようになりました。

わたしたちがやっている事業は、それを現代でやったらどうなるのだろうか？という仮説と、その課題解決の試みだと思っています。

今回、文藝春秋社と提携させていただくことは、たいへんうれしく、光栄なことです。伝統ある出版社にしかできないことと、わたしたちが得意なこと、両者の強みを生かして、だれもが創作をはじめて続けられる未来をつくっていきたいと思います。

以　上

2020 年 12 月 10 日

株式会社 文藝春秋
法務・広報部